



東北大学病院 血液・免疫科

TEL:022-717-7165

FAX:022-717-7497

2011年6月3日発行

巻頭言

まず最初に、今回の東日本大震災で被災された方々に、心よりお見舞い申し上げます。

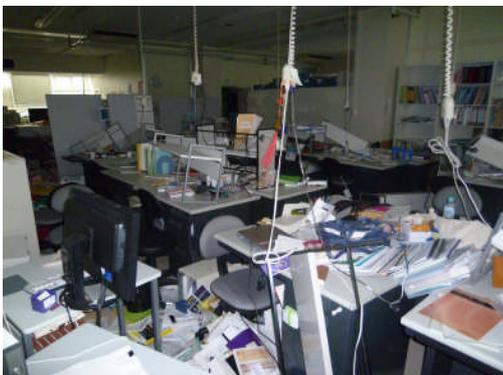
当科OBの先生方の中にも大きな被害を受けられた先生がおいでになり、伊藤第二内科同窓会長と、同窓会としてできることを現在相談しています。

3月11日の大震災後、私自身は病院の災害対策本部につめて、病院機能の復旧、沿岸部拠点病院への支援物資の搬送、医師派遣などに従事しておりました、大学病院全体の活動の詳細については、病院HPをご覧くださいただければと思います。実際に診療の最前線で働いてくれたのは医局スタッフで、大学院生も含め、血液免疫科の専門診療だけでなく、他院から受け入れた専門外の患者まで、他病棟を借りて昼夜を問わず診療してくれました。また病院内にとどまらず、石巻赤十字病院や、避難所で被災者の診療にあたってくれました。食料、ガソリンの限られる中、心折れることなく、献身的に診療に当たってくれたスタッフに感謝し、敬意を表したいと思います。研究面でも高額機器の損傷や、サンプル、消耗品の劣化など、科として大きな被害を受けました。ただし、残った機器を使って実験も早々に再開し、ミーティングなどの医局行事も4月から通常通り行っています。6月25日には例年通り一件症例検討会も行いますし、時期はずらすことになりましたが、秋には恒例の研修医向けセミナーを開催する予定です。これから、震災を言い訳とせず、震災前以上の臨床・研究レベルを目指して頑張っていきたいと思っておりますので、先生方におかれましてはよろしくご協力の程、お願い申し上げます。

(張替秀郎)

地震直後の医局の様子

3月11日14時46分、あの震災が起きた時、私は実験台に座っていました。数人の大学院生が実験室におり、当初は「あれっ、地震かな」と思った程度で、実験の手を止めようとはしませんでした。徐々に実験台にある試薬の入ったビンが大きく揺れました。「これはまずい」と思った瞬間、高いところにあるものが次々と落下し、隣にある医局内



からは女性の悲鳴が聞こえました。少し揺れが落ち着いたところで医局に来てみると、足の踏み場もない程、物が散乱していました。「この建物から外に出るように」と外部から情報が入り、秘書さんや実験助手さんたちと外に出ようとしたのですが、いつも使っているドアが全く開かず、かなり焦りましたが、後ろのドアからなんとか外に出ました。

私は以前から常にデジタルカメラを携帯し、事ある毎に写真を撮っています。今回の地震直後も、「写真なんか撮っている場合じゃない」と多くの人に言われましたが、今考えると極めて貴重な1枚だったと思っています。

(渡部パラッチ龍)

石巻赤十字病院での体験

私は3月11日を当時の勤務先の石巻赤十字病院でむかえました。激しい揺れのあと、すぐに災害対策本部が設置されました。余震の続く中、病院のロビーの椅子などは全て片付けられ、大きなビニールシートが床いっぱい敷かれました。スタッフは、トリアージ分類をする人、緑チーム、黄色チーム、赤チーム、黒チームに分かれ、患者さんたちを待ちました。そうしている間も、「～地区まで津波が押し寄せているらしい」「～は壊滅だそうだ」など、人の口から口へと情報が伝わり、またテレビでは信じられないような津波の映像が流れ、一体これからどうなってしまうんだろう？と恐ろしく思いました。3月11日の夜、石巻で電気がついて



いる場所は石巻日赤だけだったようで、自分で歩ける患者さんたちは暗い中明かりを頼りに病院へ来院されたそうです。救急車も流れ、その日の夜は思いの外患者数は多くありませんでした。

3月12日の明け方から、文字通り大勢の患者さんたちが押し寄せました。私が配属された緑チームには、津波に流されがれきや流木にぶつかり骨折・打撲した方、冷たい泥水の中で一晩をあかし低体温になった方、冷たい濡れた衣服が皮膚に張り付き凍傷のようになった方など、普段の救急では体験しないような患者さんたちを診察しました。本来であれば一人一人きちんと診察・検査すべきなのですが、そんな時間もなければ検査自体もできない、というような状態でした。施設からは動けないお年寄りたちがヘリで運ばれ、電気が使えないためHOTを使用している患者さんたちが病院に集まり、また大勢の透析患者さんや臨月の妊婦さんたちも押し寄せました。病院の廊下には家に帰れない人たちが段ボールを敷いて寝ているような状態で、病院の床は泥だらけで異臭もあり、本当に異様な状態でした。

その後全国から支援の医師や看護師、救急隊などのスタッフが集まり、救急業務を手伝っていただき、常勤医の負担は軽減されていきました。地震直後は整形外科的な患者さんが多かったのですが、1～2週間後には救急患者さんの殆どは内科疾患となり、特に多かったのは肺炎や消化管出血、心不全などだったと記憶しています。1日3交代で内科当番を回しましたが、各勤務帯で4～5人は入院するという文字通り目も回るような忙しさでした。4月に入ってから外来が一部再開され、担当患者さんたちに電話をかけ安否確認をしましたが、多くの患者さんが家やご家族を津波で失っていました。4月下旬に日赤を退職し、大学へ戻ってきましたが、仙台中心部の復興が思いの外早く進んでいることに驚きました。町の半分がなくなってしまった石巻とは大違いだと感じました。

あのような未曾有の大災害で、自分が微力ながら災害医療に携わるなど思ってもみませんでした。ここに書ききれなかった多くのことも含め、次世代にあの経験を伝えられればと思います。そして、多くの方が犠牲となり、町の産業も大きな打撃を受けた石巻の1日も早い復興を願ってやみません。

(三浦由希子)

震災後の血液・免疫科(東14階)病棟

恐らく誰にとっても人生最大と言えるであろう大きな揺れの後、スタッフのみならず普段は研究に専念している大学院生も病棟に集結し、入院患者の診療に尽力しました。

現在の新病棟は免震構造のため建物自体の損害は限定的で、非常時の水や電源の供給という点でも他施設に比べれば恵まれた物であったろうと思われます。とはいえ、それらのライフラインも備蓄に限りがあるため節約のための様々な努力を行いました。14階までの階段の上り下りも1日に何度も繰り返すのは大変な負担で、足を引きずりながら歩くスタッフの姿も見られました。物流がストップし、抗生剤や抗がん剤のみならず通常の補液や点滴ラインまでセーブしながらの診療は、災害医療から最も遠い血液・免疫科としては非常な心労でもありました。



沿岸部の被災地の患者を受け入れる一方、造血幹細胞移植など当院での治療継続が困難となった患者は関東圏へ搬送する等、他地域の協力も受け入院中の患者に関しては治療上大きな不利益をもたらさずに済んだようです。とはいえ、病院食は長い間非常食が続いたため体重が減少してしまう人も見受けられました。文句も言わず耐えてくれた患者さんたちには感謝です。

当然ながら医療スタッフの食事にも大きな支障を来し、病院からの非常食の配給はあるものの賄いきれる物ではなく、医師・看護師・病棟助手・クラークなど職種の区別無く食料を持ち寄って乗り切ることができました。お互いの信頼・協力関係を確認できたことは意義深いことだったと思います。

入院患者の管理を行いつつも、病院全体としての沿岸地域への医師派遣にも各自協力しました。主に石巻でしたが、気仙沼まで手伝いに行った者もありました。避難所の支援が多かったと思われれます。現実には我々が自動車で行ける範囲には既に医療者が入り、自分(山本)としては十分な働きができなかったという思いが残ってしまいました。石巻赤十字病院前には、

全国の日赤を中心とした施設から集結した大きな災害医療車が並んでおり、その機動力に驚嘆したことを覚えています。

当科関連の諸先生の中には、我々とは比較にならないほどの苦労をされた方々も多くいらっしゃると思われれますが、お互いの協力で医療の正常化を進めて行ければと思います。

(文 山本譲司、写真 渡部 龍)



新人紹介

今年4月から大学院1年目として入局させて頂きました、小野寺晃一と申します。出身は岩手県で、平成18年に北海道大学を卒業し、その後2年間大崎市民病院にて初期研修を行いました。その後は、岩手県立中央病院の血液内科で1年間、名古屋第一赤十字病院で2年間働きました。不慣れで戸惑うことばかりであり、これから先生方には多々ご迷惑をおかけすることと思いますが、御指導の程どうぞよろしくお願い致します。

小野寺 晃一



斎藤 陽



平成23年4月に東北大学大学院に入学、血液・免疫科に入局させて頂きました、斎藤陽と申します。出身は岩手県宮古市で、趣味はドライブと音楽鑑賞です。平成20年東北大学医学部卒業後、山形市立病院済生館で2年間の初期研修を修了し、引き続き1年間、内科レジデントとして後期研修を行いました。震災の関係で異動が1か月遅れましたが、5月より東北大学病院の東14階病棟で研修させて頂いております。

近年、血液疾患の病態の解明と治療薬の開発は急速に進歩しており、私も少しでもその研究や、診療に携わりたいと思っています。今年度は病棟での臨床診療を学び、来年度以降は研究に従事しようと考えております。血液免疫科に所属してまだ日が浅く、右も左も分かりませんが、医局の先生方から熱心に指導していただき、充実した毎日を送っております。診療、研究に一生懸命頑張りますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

4月より大学院に入学しました八田俊介です。平成20年に東北大学を卒業し、山形市立病院済生館で2年間の初期研修と1年間の後期研修を行いました。生まれも育ちも大阪ですが、すっかり東北に魅了されてしまい、地元には戻らずに東北大学に入局することを決めました。学生の頃から血液疾患に興味があり、現在は血液グループの一員として、主に病棟業務にあたっています。慣れない環境で四苦八苦している毎日ですが、できないながらも先生方に御指導いただきながら、多くのことを学ばせていただいております。今年の血液グループは、例年と比べて入局者も多いので、モチベーションを高くしながら、お互いに切磋琢磨していければと思っています。また、病棟業務以外にも、研究や学会発表なども意欲的に行っていきたいと思っています。まだまだ未熟者ではありますが、これからも御指導・御鞭撻のほどよろしくお願い致します。

八田 俊介



辻真由子



本年度より大学院生となりました、辻真由子と申します。昨年2月から本年1月まで血液免疫科で卒業研究をさせて頂いた経験を通して研究の楽しさに魅了され、大学院入学を決意いたしました。卒業研究から続き、現在は免疫療法の有効性を高めるための研究に従事させて頂いております。何の知識も技術もない状態で、好奇心だけを持って受け入れていただいた1年前から、多くの先生方・大学院生の先輩方・技師さん・秘書さん等のお世話になり、ご教示を賜りながら、新たなことを学び続ける毎日です。気合いだけは人一倍ありますが、空回りで終わらぬよう、この2年間をかけて臨床応用へと繋がる結果を残したいと考えております。恵まれた環境で研究できることに日々感謝をしながら、今後も研究活動に勤しんでいきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願い致します。